

人間行動研究と看護学

弘前大学 北村 光二

コミュニケーションの行動学的理解

この発表でお話したいことは、私たちが「コミュニケーション」ということについて漠然と思い込んでいることが、意外といかげんなものであるということ、少くとも、「コミュニケーションとは何か」ということにかかわる、本質的にはまったく異なった二つの考え方が区別されずに共存している、だからそれらをきちんと区別すべきだ、ということです。内容としては、それらがどう区別されるのか、そのような区別がなぜ重要なのか、という点について、人びとの行動をありのままに記載してそこにパターンを発見しようとする方法、つまり行動学的な視点からの理解をご紹介しますということになるはずですが。

「コミュニケーション」についての二つの理解

私たちが「コミュニケーションとは何か」ということについて常識的に信じていることは、まず第一に、次のようなことだと思えます。コミュニケーションとは、言語的メッセージの交換のことであり、そのようなメッセージは、ボールが手渡されるときにように人びとの間を移動するが、この移動ということにこそこの現象の本質があると考えます。それに対して第二の考え方は、ここにお集まりの皆様の御専門である「看護」という領域とも無縁ではないのですが、コミュニケーションをたんなるメッセージのやり取りと考えるのではなく、それに関与する人びとの間の「関係」を作り上げたり、維持したりするものとして捉えようとする立場をとりまします。「夫婦のコミュニケーションが足りない」とか、「子どもの発達には親子の良きコミュニケーションが不可欠だ」という言い方をするときの考え方がこれに当たります。

この二つのコミュニケーションのうちの第二のものは、「関係の伝え合い」としてのコミュニケーション

と呼べるはずのものなのですが、それがどのような意味で第一のものと異なっているかについて、いくつか例をあげて考えてみたいと思います。

まず、I love youというメッセージを伝える、つまり「私はあなたを愛しています」ないしは「私はあなたが好きです」と言うという場合を考えてみます。コミュニケーションについての第一の理解というのは、あるメッセージがAからBへと移動するということが重要だと考えるわけで、この場合も、まずそのメッセージが伝わるということが問題で、さらにいうとすれば、誤りなく正確に伝わる、ということが本質的なことだと考えられるのです。したがって、逆にいうと、伝わりさえすれば、正確に伝わりさえすればそれでいいということになってしまいます。つまり、私は妻を愛しているのだから、とにかく毎日I love youと言い続けなければならない、あるいはそう言い続けられればそれでいいというニュアンスがそこに付着してしまいがちです。

それに対して第二の理解では、あるメッセージを伝えるときにそれをどのようなやり方でするのか、ということの重要性が強調されます。具体的にいえば、I love youと言うときに、相手の目をじっと見つめて言うとか、そのとき声が思わずちょっと震えるとかということが、この場合のコミュニケーションにとって重要なことだと考えるわけです。それは、俗っぽい理解に即していえば、そのメッセージを伝えようとする人の「思い」がこもっているかどうか、そしてその「思い」がちゃんと相手に伝わるかどうかの問題だということになります。コミュニケーションについての第一の理解との違いを強調するためには、まずそのように考えておけばよいと思います。ただ、そのような「思い」がどうすれば伝わるのかということをも視野にいれようすると、それだけでは何もわかったこと

にはならない、ということになります。

「関係の伝え合い」としてのコミュニケーション

この第二の考え方の特徴をもう少し分析的に考えてみます。再度 I love you と言う場合を取り上げると、一人でもんもんと考えて、私はあの人が好きだ、好きだと思いつめて、その思いがぎっしりと詰まったことばを相手に投げかければそれでいいかという、私たちはそのような I love you をちっともいいとは思わない。つまり、ひとりよがりではいけない、もう少しかたいことばでいえば、この「思い」は一方通行的に相手に手渡されるものではない、ということになります。ここで想定されているコミュニケーションは双方向的で循環的なものであって、相手がそのコミュニケーションの過程に積極的に参加し、「相互理解」としてそれを支えるということがあってはじめて、このような「思い」が伝わることになるのだと考えられるのです。

最初の部分で私は、この第二のコミュニケーションを「関係の伝え合い」としてのコミュニケーションと呼び、それが当時者間の「関係」を作り上げたり、維持したりするものだと考えました。そのような考え方の特徴とは、まずこのコミュニケーションの「相互性」ということなのです。それが「伝え合い」という言い方に込められた意味です。そして次に問題になることは、そのような「相互性」が結果的に「関係」を作り上げるといことになる、という点です。それは以下のように理解できます。

ここで問題としているコミュニケーションは、当事者の一方の観念や思想を表明したり相手に伝達したりする過程ではないのです。相手に向かって「本気で」I love you と言うことは、そう言うことによって私と相手との間の「関係」に何らかの変更を加えようとすることなのであり、そのような意味で現実を変えようとする企てになっているのだ、と考えるべきなのです。そして、そのような企ての提案に相手が応じて、肯定的にであれそのやりとりに参加したとき、そのようなコミュニケーションの過程は、結果的にある「関係」を作り出してしまはずです。

これまでのところでは、I love you と相手に言うという場合、つまり相手との「関係」に直接言及することによって誘導される過程を問題にしてみました、

ここで話したい「関係の伝え合い」としてのコミュニケーションとは、決してそのようなものに限られるというわけではありません。ただここでは、そのようなコミュニケーションの全体像を検討するというのではなく、むしろ特定の話題に焦点を絞って、コミュニケーションを「関係の伝え合い」として理解するという考え方の重要性を明らかにしたいと思います。

身体的メッセージの交換

この発表の題は「コミュニケーションの行動学的理解」となっていますが、ここで取り上げたい話題とは、ことば以外の身体的メッセージの交換、つまり、身ぶりやしぐさによってなされるコミュニケーションという現象です。この身体的メッセージの交換という現象を正当に評価しようとしたとき、この「行動学的理解」が不可欠となる、つまりコミュニケーションを「関係の伝え合い」として理解することがどうしても必要となる、というわけです。

身体的メッセージの交換という現象を考えるとのもっとも中心的な問題の一つは、身ぶりやしぐさをもつ意味というものが、辞書を引けばわかるというかたちで一義的に指定されることがない、という点です。相手を見つめることは、ある時には愛情の表現だとも考えられますが、別の場面では威嚇と理解されるのです。一方、たとえば講義中に学生が教師をじっと見つめているという場合には、それとはまったく別の意味が考えられなくてはならない。

さらに、この「意味が一義的に指定されない」という問題は、もっと奥行きのある、微妙で複雑な要素を抱えているのです。たとえば、同じ愛情の表現として相手を見つめていると考えられる場面でも、相手がその視線に気付いて当の人間の方を見るという展開までも視野に取り込もうとすると、その後の「見つめ合う」（あるいは「見つめ合わない」）という事態に向かってきわめて複雑なコミュニケーションが繰り広げられることになるはずなのです。私が相手をじっと見つめているとふっと相手と目が合い、思わずちょっと目を逸せてしまう。相手も視線を下に落とすが、しばらくしてまたこちらに目を戻してくる、と。このようなコミュニケーションでは、相手を見たり目を逸したりするというそれぞれのしぐさが、単独で何らかの意味を担っているというかたちで、その全体の過程が理

解できるようになるとはとうてい考えられないのです。

身体的メッセージとは、たんに相手に何らかのメッセージを伝達するというだけではなく、いつでも、それを受け取った者に何らかの現実的な反応を要求するものなのです。たとえ相手がそれを完全に無視したとしても、そこには「一方の働きかけを他方が無視した」という「関係」が実現されてしまいます。身体的メッセージの交換において、人びとは結果的に何らかの「関係」を伝え合うことになるのです。

これまで述べてきたことは以下の二つのことでした。まず第一は、身体的メッセージから読み取られる意味というものが、場面や文脈に応じて多様なものになるということ、第二に、それがいつでも相手の現実的な反応を要求するものだという点です。そして、この二つの問題は決して無関係なものではないのです。第一のものは、そこで交換されるメッセージがより抽象度の高いものだということ（だから文脈に応じて多様な意味になる）を示しており、第二の点は、しかもそれが、私やあなたの「思い」と直接に結び付いたメッセージであること（だから第三者的な態度をとって無視することができない）を示しているのです。だから、そこで交換されるメッセージとは、「私とあなたの関係」という一般的で抽象的な内容に関わるものになるのであり、一方で、そのようなメッセージの交換によって何らかの「関係」がそこに作られることになるのだと考えられるのです。「関係の伝え合い」としてのコミュニケーションという言い方が示していることは、これに尽きます。

「笑い」のコミュニケーション

以上に示したようなコミュニケーションの「行動学的な理解」によって、人びとの現実の身体的メッセージのやり取りが、どのようにみえてくるかを具体的に示してみましょう。ここでは、「笑い」という、私たちがよく知っているはずであるにもかかわらず、よく考えると何とも捉えどころのない性質をもった身ぶりを取り上げてみます。「笑い」という現象については、古今東西に数多くの論考や研究があり、ここでその論争にけりをつけたいというのではもちろんありませんが、それを理解する上での一つの視点を示したいと思えます。

「笑い」という身ぶりも、他の身ぶりと同じように、

場面や文脈によって異なった意味をもってしまいます。ある場面で「笑い」は、「楽しさ」を示しているものと理解されますが、別の機会には、「嘲笑」ということばがあるように、それがあつ種の「攻撃」だと考えられるのです。さらにもっと多様な笑いの意味が想定できるのですが、ここではこの二つの笑いとは明確に区別されるものでありながら、それらと近い関係にある「苦笑」、あるいは「自嘲的な笑い」というのを付け加えておきます。この三つの笑いが相互にどのように位置づけられるかを以下で考えてみます。

まず出発点は、ある場所にいる人が皆笑っているとき、その笑いはいつでも「楽しい笑い」と理解されるということです。つまり、笑い合うという状態では、その笑いが何を意味しているのかと詮索されることがないのです。したがって、それ以外の二つの笑いは、一方が笑っているのに他方が笑っていない場合に、その一方の笑いに付与される意味なのだと考えられるはずで

柳田國男は、「殊に日本人では人が笑い自分が笑われる不幸を痛感する人が多かった」（「笑いの文学の起源」）と述べていますが、このように一方が笑って他方が笑われていると感じるとき、その笑いは攻撃的な笑いということになります。また、笑う側の立場からいえば、攻撃的な笑いとは、相手が笑わないこと、少なくとも自分と同じ程度には笑わないことを強要する笑いなのです。攻撃的な笑いの典型と考えられるものは、相手の注意を引くほどに声高な笑いや、すぐにそうと気づかれるような口を歪めた笑いです。このような笑いを向けられた相手は、自分がそれと同じ笑いを返せないことをむりやりに自覚させられるのです。

この二つの笑いに対比すると、最後の自嘲的な笑いというのも、分かりやすくなります。この笑いは、攻撃的な笑いとは違って、相手と一緒に笑ってくれることを期待する笑いなのです。ただし、そのとき相手が笑ってくれず、笑い合うという状態にならない、という笑いだと考えられるはずで

自嘲的な笑いを向けられたとき、相手がそれを攻撃的ではない自嘲的な笑いだと理解する理由は、その笑いに対して自分が笑い返さないのは、笑えないからではなく笑ってやらないからだと考えていることに求められます。失態を演じてとがめられたときに思わず出てしまつて笑いに対して、とがめた相手が笑い返してくれないだけではなく、

追い打ちをかけるように「笑っている場合か」と叱りつけるということがよくあります。これは、一緒に笑ってやることを私は拒否しているのだとわざわざ言明しているようなものなのです。

以上のことをまとめると、まず、一緒に笑う「楽しい笑い」と、それ以外の、一方だけが笑う笑いがあります。そして、一方だけが笑う、つまり一緒に笑わないという場合があります、その「関係」を笑う側が仕掛ける「攻撃的な笑い」と、それを笑いかけられた側が作ってしまう「自嘲的な笑い」がある、ということです。このような理解に特徴的なこととして強調すべき点は、まず第一に、この「笑い」という身ぶりが相手の同じ「笑い」を誘発する力をそなえているという考え方です。だからこそ、笑いかけに対して相手が笑うか否かということが問題になるのです。そのような意味で、相手と共にいる場でどのように笑うかをめぐってコミュニケーションの過程が進行するのです。

そして、このコミュニケーションとは、決して、「笑い」という身ぶり自体にそなわっている複数の意味を、そのときその場で適当に引出して読み解いているというのではない、という点も重要です。そこにあるのは、「笑い」という身ぶりを手がかりにして、それを共有するのか、あるいは相手が笑えないように笑うのか、あるいは一方の笑いかけを他方が拒否するのかというように、その場にいる人びとが、どのように笑うかをめぐるある「関係」を作り上げるということなのです。つまりそれは、「笑い」という身ぶりを媒介とした「関係」であり、「パターン」であり、「形代」なのです。

これまでのところで、身体的メッセージの交換という現象を例にひいて、「関係の伝え合い」としてのコミュニケーションというものについて考えてきました。そしてじつは、この「関係の伝え合い」としてのコミュニケーションとはもともと、言語以外の身体的メッセージの交換という現象と強く結び付いたものなのだと考えられるのです。すでに何度も指摘したことですが、身体的メッセージとはいつでも、それを受け取った者に何らかの反応を要求するものであって、そのような

メッセージの交換において、人びとは結果的に何らかの「関係」に入らざるをえなくなってしまうことがあります。さらに、人は「関係」にかかわる本心を相手に伝えようとするとき、あるいはそれを相手から読み取るようとするとき、言語以外の手段に目を向けるのがつねのようなのです。頭を下げ、手をついて謝るのなければ相手が承知しない、ということがあるのです。

このような身体的メッセージが持っている特徴を、言語的メッセージと対比して捉えることによって、最初の部分で述べた二つのコミュニケーションの区別が明確になるはずですが、まず、言語的メッセージは、「主語+述語」という構造に即して、外部世界の事物を名指し、それがあつた性質をもっているとか、ある状態にあるとか具体的に特定することができるという点に、最も大きな特徴があると考えられます。つまり言語的メッセージとは、第三者的に何かについて「報告する」ものとして用いられることが中心となるのです。コミュニケーションについての第一の理解、つまり、「ボールが手渡されるように人びとの間をメッセージが移動する」という考え方は、このような性質をもった言語による第三者的な報告」という現象に焦点を当てたコミュニケーションについての理解なのだということとなります。

それに対して、身体的メッセージの交換では、そのメッセージは第三者的なものには決してなりえず、それを発信することは、「関係」の一端に自らなり、それと共にもう一方の端を相手に提案する、ということになるのです。そのときのコミュニケーションでは、当事者の身ぶりやしぐさのいちいちが運ぶメッセージが何であるかということではなく、それらの身ぶりが組み合わされて結び合うパターンこそが問題になるのです。そして結果的に、そこには何らかの「関係」が作り上げられることになるわけです。そのような意味でそれは現実を変えようとする企てになっているのです。コミュニケーションについての第二の理解が提案している最も重要な点の一つは、コミュニケーションをたんに「個人の観念を表明し伝達する過程」として捉える通常の理解に対して、大きな変更を迫るものだという点なのです。